

◎特集 ユーラシア東西における古文書学の現在◎

序

佐藤雄基

本特集は、二〇一四年六月二一日(土)一四時半より、立教大学池袋キャンパス五号館にて開催された二〇一四年度立教大学史学会大会シンポジウム「ユーラシア東西における古文書学の現在」をもとにしたものである。報告者による寄稿論文に先立ち、本シンポジウムの企図するところを記しておきたい。

第一には、古文書という史料を一国史的な枠組みをこえた時間的・空間的な広がりにおいて捉えるという狙いがある。伝統的な古文書学は、文書の発給主体である政権・国家の枠組みの中で文書の様式・機能・伝来を考える傾向があった。だが、古代ローマの文書様式が西欧中世に影響を及ぼしたように、文書様式・形態は地域や時間をこえた広がりをもつ。本特集では、「モンゴルの世紀」以前のユーラシアの東西という時空をフィールドとして、古文書からみたグローバルヒストリーの可能性を探るものである。

第二には、古文書学への学史的な関心がある。古文書学とは、歴史研究の素材となる「史料」のうち古文書を対象とする学問であり、一次史料を重視する近代歴史学において重要な補助学の一つとなった。近代的学知としての歴史学が一九世紀以降、世界各地に広がるとともに、西欧由来の古文書学もまた各地の歴史研究に応用されたが、各地に残された文書史料の多様性に応じて様々な変容を遂げた。かつて河音能平氏は「史料の残存・伝来形態をそれぞれ異なる諸民族の歴史を比較するに際して、その史料の残存・伝来形態の民族的特殊性とそれに由来するそれぞれの史料学の特異性」を説明する必要性を説いたが、『世界史のなかの日本中世文書』、諸地域における古文書学の学史と現状を再確認する作業は、将来の比較史・比較古文書学に向けた基礎作業になると思われる。

第三には、上記の作業を現時点で行うことの積極的な意

義として、現代歴史学における「史料論」の盛行に応じて、古文書学を如何に再構築するののかという問題意識がある。近年、研究の素材となる「史料」そのものの性格を追究する「史料論」が隆盛し、時代・地域ごとに実証的な個別研究が深化する反面、その体系化は十分に行われていないように思われる。これまでも国際的な学術交流の試みの例として、史料類型論による日英比較を試みた鶴島博和・春田直紀編『日英中世史料論』（日本経済評論社、二〇〇八年）、史料管理という観点から国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『中近世アーカイブズの多国間比較』（岩田書院、二〇〇九年）などがあるが、何れも現段階における日欧の個別研究の突き合わせに軸をおいていた。本特集もまた古文書学の現在に焦点をあてて、その突き合わせを企図したものである。

以下四本の論考とコメントから成る。第一論考は、西欧初期中世史・古文書学を専門とする菊地重仁（東京大学大学院総合文化研究科）による「初期中世ヨーロッパ政治史への「文書形式的」アプローチ―定型表現の形成とその意義について」、第二論考は日本中世史を専門とする佐藤雄基（立教大学文学部）による「日本中世前期の文書様式とその機能―下文・奉書の成立を中心にして」、第三論考は朝鮮古文書学を専門とする川西裕也（東京大学アジア

研究図書館）による「高麗の国家体制と公文書」、第四論考は、モンゴル帝国史を専門とする四日市康博（早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所）による「ユーラシア史的視点から見たイルハン朝公文書―イルハン朝公文書研究の序論として―」である。日本史・西洋史・東洋史（東アジア・西アジア）から、九〜一三世紀（いわゆる「中世」と呼ばれる時代）の古文書を研究対象とする四名の若手研究者の論考を集めた。最後に総括として、比較史的観点から日本中世史・史料論を研究してきた高橋一樹（武蔵大学人文学部）が全体に対するコメントを付す。

古代ローマの影響を受けた中世西欧、中国の影響を受けた古代・中世日本、中国の文書様式の影響を受け続けた朝鮮、中国と西アジアの双方にまたがるモンゴル帝国、本特集では、古代と中世、東と西、それぞれの時空の広がりの中で、古文書学という共通項を設けて比較する。それによって、西洋史・東洋史・日本史という伝統的な分野の枠をこえた歴史学の可能性について考える契機となることを願うものである。

（本学文学部准教授）